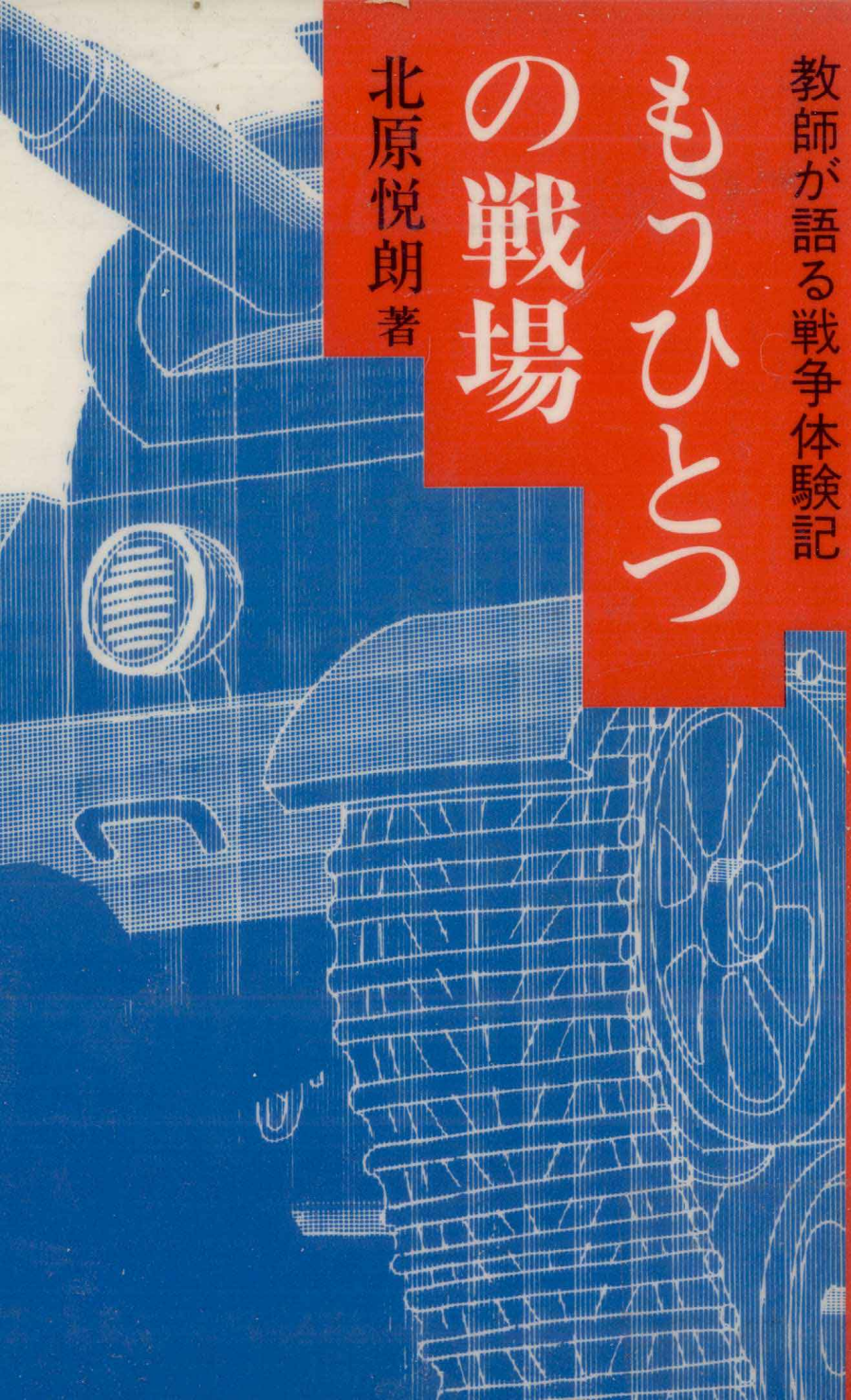
教師が語る戦争体験記

もうひとつの戦場

北原悦朗 著



『母と子』の教育書シリーズ——4

教師が語る戦争体験記

もうひとつの戦場

[illegible]悦朗 著

みくに書房

『母と子』の教育書シリーズ 4
もうひとつの戦場　教師が語る戦争体験記

1985年8月10日　第1刷発行　　定価 2,000円

著　　者　北　原　悦　朗
編集・制作　『母と子』編集部
発行人　安　藤　正　春
発行所　株式会社 みくに書房
〒112 東京都文京区後楽2—18—19
電話 03—813—4 5 2 8（代）
振替・東京 6—9 1 6 8 9

© 1985年

ISBN 4-943850-14-6　C 0037
印刷・製本　ミクニ印刷
落丁・乱丁はお取りかえいたします

目次

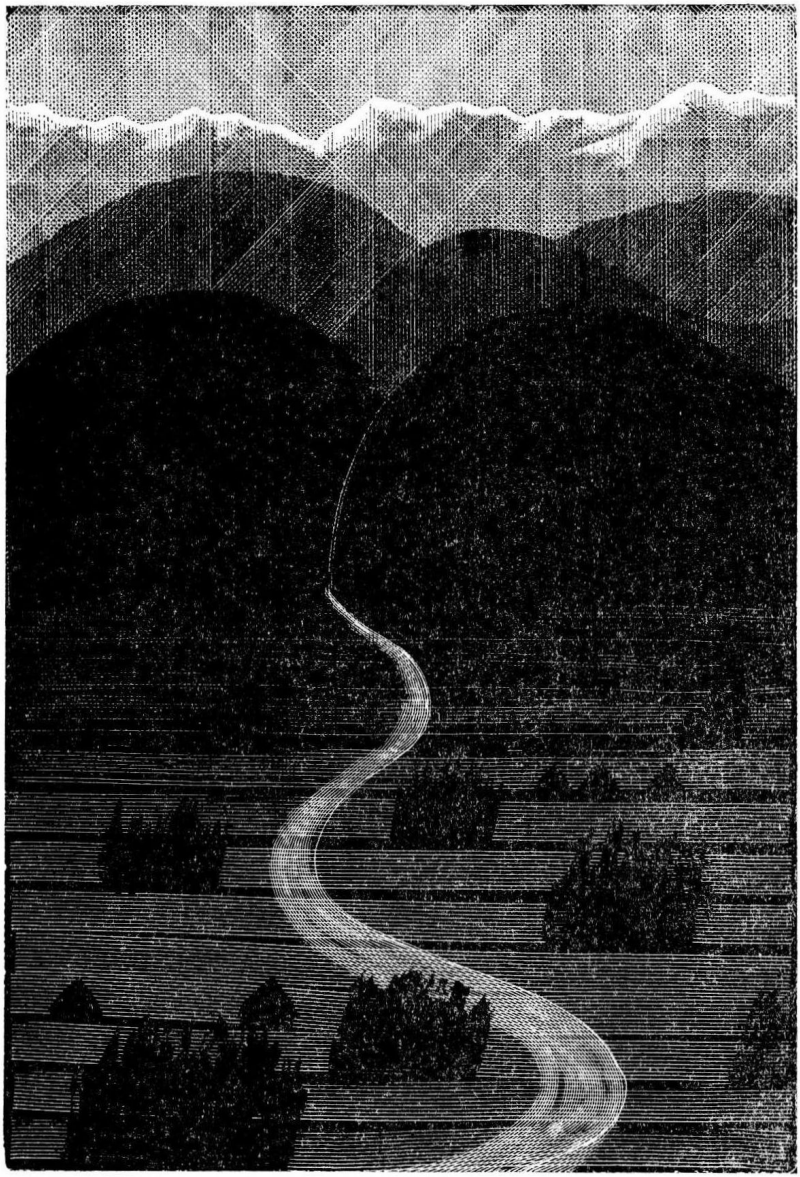
はじめに　戦争体験を語りつづけて……3
第一章　戦争との最初の出会い——信州の農民の子……13
第二章　徴兵検査——満州へ渡る……49
第三章　入営——機関銃中隊へ……87
第四章　対戦車特攻隊へ——ソ連との戦争にそなえて……121
第五章　無条件降伏——戦いは起こらなかった……141
第六章　武装解除——ソ連軍の捕虜となる……159

第七章　偽わりのダモイ（帰国）――ラーゲル（収容所）へ……185
第八章　入院――手術後、炊事勤務に……209
第九章　中央アジアへの貨車の旅――どうせ俺たちは捕虜……253
第十章　チルチークでの抑留生活――人間のやさしさに国境はない……267
第十一章　結核再発――魔のレンガ工場へ……303
第十二章　砂漠の町マルイにて――帰国の期待を抱かず……325
第十三章　ダモイ（帰国）――民主化をめざして……343
あとがき……363

装丁・挿画　小林　敏也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

はじめに　戦争体験を語りつづけて



ここ三十年来、私は、担任した子どもたちに、『北原二等兵物語』と題して、自分自身の戦争体験を語り聞かせてきました。

私の小学校入学は、一九三二（昭7）年、満州事変の最中でした。日華事変（日中戦争）の始まった一九三七（昭12）年は、ちょうど六年生でした。中学二年生のとき（一九四一年）大東亜戦争（日本では太平洋戦争をこう呼んだ）が始まり、一九四五（昭20）年、十九歳で、陸軍歩兵として、関東軍に入隊させられました。私たちの世代は、小学校へ入学したときから、軍国主義教育を受け、やがて戦場に狩り出され、はかり知れない大きな犠牲を強いられてきました。さいわい私は生き残りましたが、ソ連軍の捕虜となり、三年間、強制労働に服し、一九四八（昭23）年七月、やっと日本に帰ることができました。そして一九四九年四月、小学校教師として、人生の再出発をしました。そのときから、子どもたちに、戦争の悲惨さについて、折にふれては自分の体験を話してきました。一九五四（昭29）年三月、担任していた子どもたちといっしょに、映画『二十四の瞳』をみました。そのとき、私は「平和教育に徹した語部になるのだ」と、あらためて決心しました。

以来、より意識的に、より計画的に、自分が経てきた数年間の歩みの一部始終を、順序だてて、週一時間ずつ、一年半から二年に及ぶ長編『北原二等兵物語』として、いつ担任した子どもたちにも、語り聞かせてきました。

低学年を担任したときは、やさしくわかりよく変え、理解できそうもないところは省いて話しました。高学年の子どもたちには、社会科の歴史ともむすびつけ、学習に役だてました。そして、いつでも、父母

や祖父母の戦争体験なども聞きださせ、結びつけて、より身近な問題となるように努力してきました。ときには母親たちにも語ったり、学級通信へ『北原二等兵物語』として載せたこともありました。

私は涙もろい人間ですから苦しくなって泣けてしまい、話がしばらく途切れてしまうようなことがあります。私が泣いたとき、初めのうちは、何人かは不思議そうな顔をして私を見つめ、何人かの男の子はくすくすと笑いをもらしています。ところが、回をかさねると、そういう子どもたちも、話の内容に引き込まれ、私とひとつ心になって聞きひたるようになります。女の子など、私とともに涙しながら聞いています。私の胸がいっぱいになって語れなくなると、子どもたちは身じろぎもせず、じっと、私の心の静まるのを待ってくれるようになっていきます。

（小四　矢沢　敦司）

※日記※

四月八日（木）　先生のなみだ

学校で先生が北原二等兵物語というお話をしてくれました。北原先生はお話をしながらなみだを出していました。ぼくもかなしくなった。

せんそうはいやだといっても、せんじょうへいかせるというざんこくさがわかりました。いかないとひこくみんになり、となりの人とか、ぶらくとか、村の人たちにきらわれ、なかまはずれにされたりするといいます。

先生には、今でも思い出すほどの苦しみがあったのだと思います。

これは、担任してから一週間後、初めて『北原二等兵物語』を話したときの子どもの感想です。

※日記※　　（小三　宮下（みやした）　佳子（よしこ））

十二月二十七日（水）

五時間めに北原二とうへい物語をしてくれました。へいたいがすわったままで死んでいたところや、水の中にへいたいのしがいがごろごろしていたというところなんか、わたしは気持ち悪いような、かなしいような気で聞いていました。

先生がしんけんに話してくれるお話を、わたしは「ああ、せんそうっていやだな。せんそうがあったら、わたしどうしよう。」と思いながら聞いていました。

三年生は三年生なりの受けとめ方で、真剣に聞いています。

〔詩〕**聞きたいこと**　　（小二　岡藤（おかとじ）　光二（こうじ））

先生は　せんそうのことを
話してくれるときは
いつも　いっしょうけんめいだ。
でも　教えて　ほしいことがある。

せんそうを　どうしてやったか
ぼくには　わからん。
人が　なん人も　しぬし、
いえや　はたけが　こわされるから
やらんほうが　いいのに。
やると　なんの　とくが　あるのかなあ。
ぼくには　わからん。
人が　しにゃあ
おやや　子どもが　かなしがるのに
どうして　せんそうなんか　するのか。
日本が　せんそうをして
先生が　せんそうに　いけば
生との　ぼくたちだって　かなしい。
先生
どうして　せんそうを　するのか、
知っとったら　教えて。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

二年生でも、こんなに鋭くとらえる子どもがいます。

※手紙※

先生の二等兵物語、感無量で聞かせていただきました。私の身内には、戦争体験をした人がいないので、このようなお話ははじめてです。

本では『聞けわだつみの声』『流れる星は生きている』『人間の条件』『非情の庭』など読みましたが、事実、本当にあのような目にあわれたのかと、身ぶるいする思いでお聞きしました。

どうか先生の貴重な体験を、できるだけ多くの人に語り、また、ぜひ記しておいてほしいと思います。

人間が人間として、あやまちなく歩けるように、絶対にあってはならないこととして、子どもたちの頭の中にやきつけておいてほしいと思います。（小林　賀津）

「子どもたちばかりでなく、親たちにも『北原二等兵物語』を聞かせてください」

といって集まった学級の母親たちに、涙しながら語ったあと、何通か寄せられた手紙のなかの一通です。

二十年も前に担任した教え子に、「先生に算数や国語を教わったことは覚えていないが、泣きながら二等兵物語を聞かせてくれたことは今でも忘れん」と言われてびっくりしたことがありますが、「もう一度聞きたい」という教え子は大勢います。

一昨年（一九八三年）の六月、飯田市有線放送局の下平美奈子プロデューサーが、別のことで私のところへ取材にみえたとき、たまたま、話が『北原二等兵物語』のことにふれました。すると下平プロは「ぜひ有線放送の自主番組『朝の文庫』で語ってもらえませんか」とおっしゃるのです。私は断われなくて、「ご期待にそえるかどうかわかりませんが、おひきうけしましょう」と約束してしまいました。

私としても、退職したあかつきには、語り聞かせてきたことをまとめて、本にしておきたいと考えていましたから、まことによい機会に恵まれたというものです。

徴兵検査を受けるために満州へ渡ることになったところから敗戦までの体験を、十二項目にしぼって、それぞれを四百字詰め原稿用紙十枚ほどずつにまとめ、その年の九月、連続十二回、私自身の朗読で放送しました。子どもに語ったときと同じように、涙が出てきて読めなくなってしまったり、声をつまらせながら、やっと読むというような場面がたびたびで、いささか恥ずかしい朗読になってしまいました。

ところが、声を詰まらせての、せつなく苦しい朗読が、かえって市民の皆さんの共感を呼び、たいへん好評だったということで、ひきつづき翌年（一九八四年）も『北原二等兵物語・捕虜編』として、舞鶴上陸までを放送させていただきました。

そして、この年は原爆忌や終戦記念日にちなんで七月十五日から八月十九日まで、原則として日曜日を除いて、連続三十回、やはり私自身の朗読で放送しました。

昨年以上に苦しくなり、涙が出、途切れがちな朗読になるところが、ずいしょにありましたが、昨年に倍して、多数の市民の皆さんが聞いてくださいました。放送の途中にも、放送終了後にも、毎日のよう

に、たくさんのお便りや励ましの電話をいただきました。また、放送局のほうへも、「毎朝、聞かずにおれない」とか「すばらしい企画だった」「北原先生の住所を教えてほしい」「テープにダビングをしてくれ」というような電話や、お便りが、連日、寄せられてきたとのことです。

「ダビングするだけだって五時間もかかるのですから、『一人ひとりはお受けしかねます』とお断わりしてるんです。『その代わり、北原先生が、いまに本にしてくださるそうですから、そのときお買いください』って言ってありますから、早く書いてくれないと困ります」

と下平さんから言われて、いささか、あわてました。

捕虜生活中、私が兄のように頼りにしてきた大分県中津市の中野更生さんのことが、「捕虜編」のなかにたびたび出てきます。一昨年（一九八二年）五月二日に、直腸癌の手術をうけて療養していた私を、中野さんは中津からわざわざ見舞いに来てくれました。ところが中野さんは、自分では肝硬変だと言って、あまり気にとめていませんでしたが、肝臓癌にかかっていたのです。しかも、すでに末期に入っていたようです。五日の朝、飯田駅で別れるとき、ふと、暗い予感が私の胸をかすめました。私は中野さんを元気づけるために、

「中野さん。秋にはこっちから逢いに行きますから、待っててください」と言いますと、中野さんは、

「楽しみに待ってるよ」と、手を握りあって、上り電車で帰っていきました。

その日から二十六日目の五月三十一日、中野さんは永遠の眠りに就いてしまいました。

引き揚げてきた一九四八（昭23）年七月十四日の午後、再会を約して京都駅で別れたのです。あの日から三十四年、私との約束を果たすために飯田へ来ることが、中野さんの生命の最後の燃焼だったのです。残っていた生命力のすべてを、私に逢うために使い果たして死んでいったのです。

書きながら、中野さんのことを思い出すだけでも、私にとっては、心も体も切りさいなまれるほどに、つらく悲しいことでした。

捕虜時代の命の恩人、安井軍医さんとは、一九七二（昭47）年以来、四回もお逢いしています。今年は偶然にも『北原二等兵物語』を放送最中の、七月二十九、三十日と、木曽でお逢いし、その後、私の家へも立ち寄ってくださいました。三十日の午後、

「二等兵物語の完成を待っています。がんばって書いてください」

と励ましてくださって、伊丹のお家へと帰っていかれました。

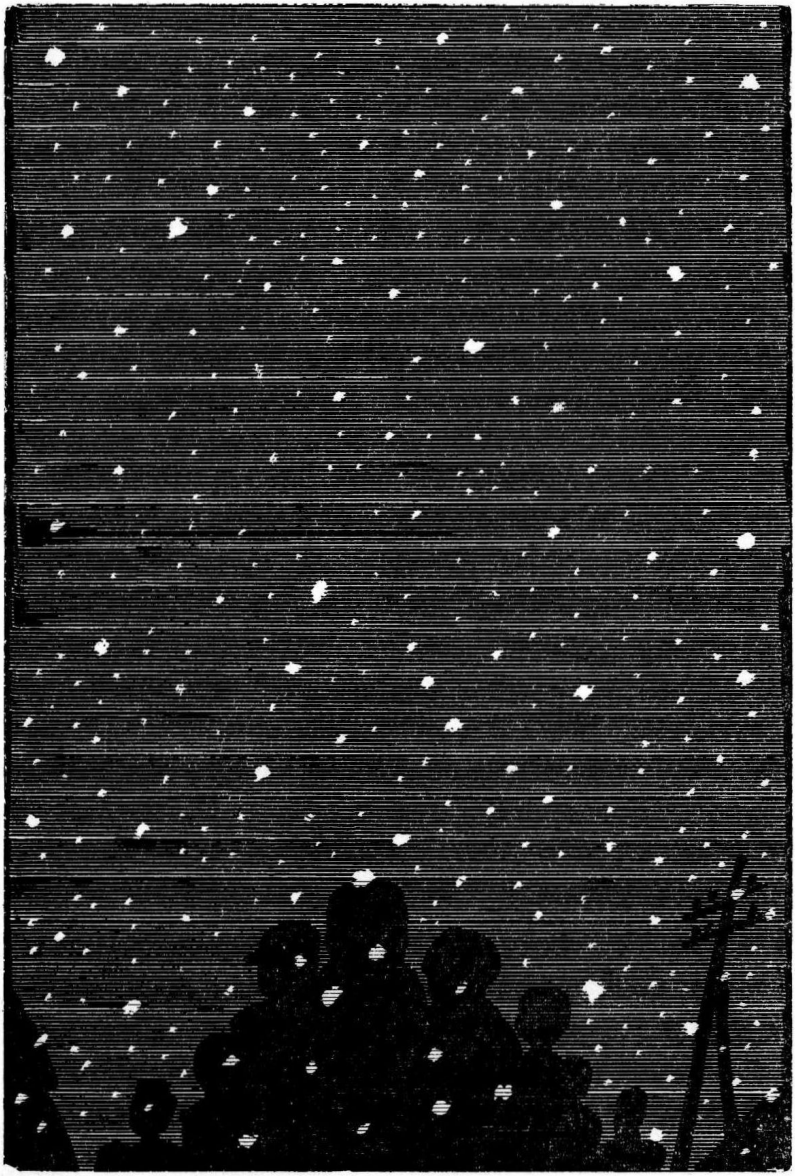
この書は、なによりも、まず、中野さんの霊前にお供えしたいと思います。そして、無念の死を遂げた多くの戦友・同胞のみなさん、苦しかった軍隊生活・捕虜生活の時代に、私を救い支え、励ましてくださった安井先生をはじめ、多くの方がたに捧げたいと思います。

そして、戦争という愚行を繰り返さないために、一人でも多くの人に読んでいただけるよう願ってやみません。

榧の木館（筆者の私立図書館）にて　　北原　悦朗

第一章　戦争との最初の出会い

——信州の農民の子



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co